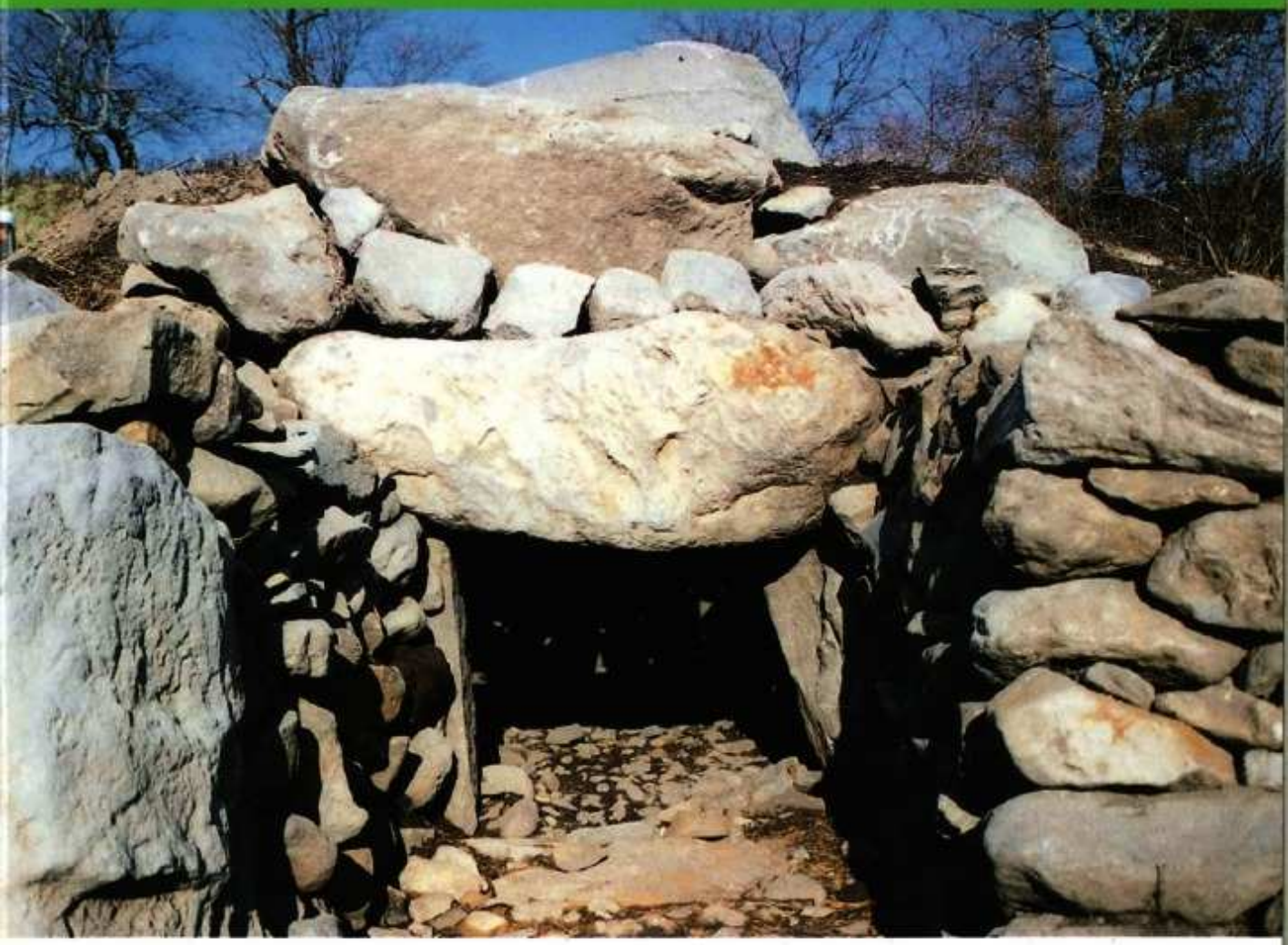
○1998. 3. 長野県北佐久郡御代田町教育委員会

復元整備された馬瀬口
めがね塚1号古墳
発掘調査報告書



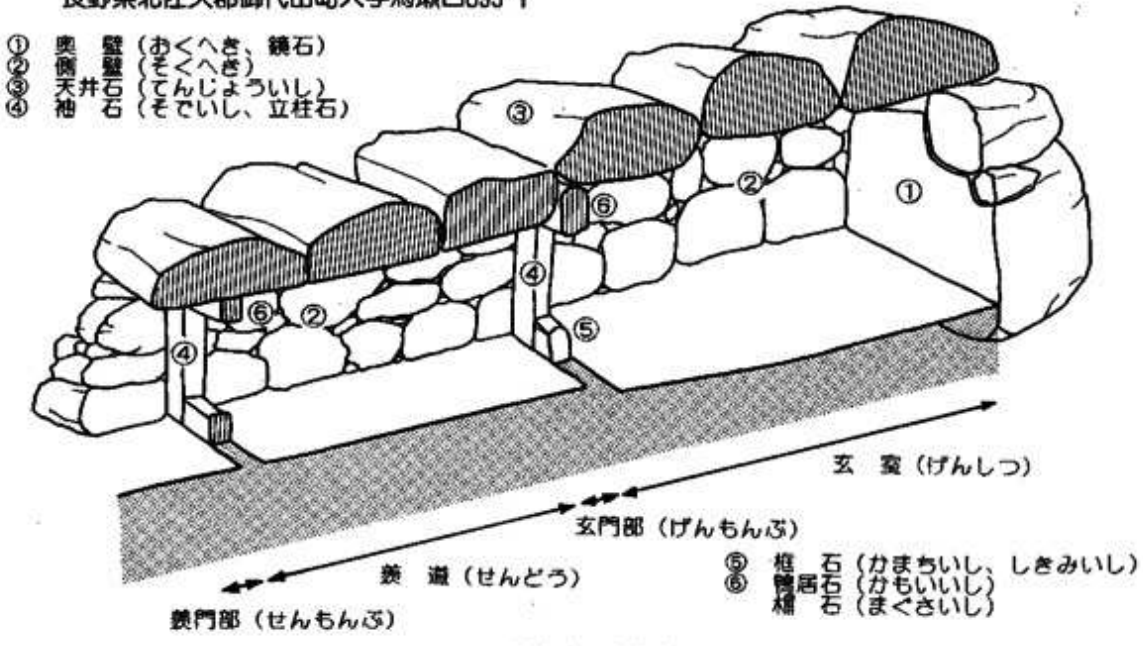
○町内最大の石室を正面から

横穴式石室

日本列島では、まず九州玄界灘沿岸で採用された石室。6世紀になると畿内を中心に全国へ広がり、7世紀前半まで盛んに造られた。後半になると古墳造り自体全国的に減少したが、佐久地方ではそれに逆行するかのように古墳が造られた。めがね塚古墳もその一つである。個人用の竪穴式石室と違い、入り口を閉じた石を取りはずせば何回でも遺体を葬ることが可能である。

めがね塚古墳の位置

長野県北佐久郡御代田町大字馬瀬口895-1



横穴式石室模式図

発掘調査の関係者（敬称略）

参加者　山岸　修、花房茂治、大井佐一
　　中込輝子、神藏惇子、砂連尾恵美子

復元工事　柳沢土木（軽井沢町発地）

基準点測量　大井政彦

事務局　教育長　柳沢忠良、教育次長　土屋和雄
　　社会同和教育係長　茂木康生
　　同　係　荻原　浩、堤　隆、小山岳夫

調査協力　山本元栄、柳沢吉兼（土地所有者）
　　宇賀神誠司、土屋　積、冨沢一明、
　　福島邦男

調査の期間

発掘調査　平成8年8月20日～9月4日、平成9年10月15日～10月31日

整理調査　平成8年9月6日～平成9年3月31日、平成9年11月4日～平成10年3月31日

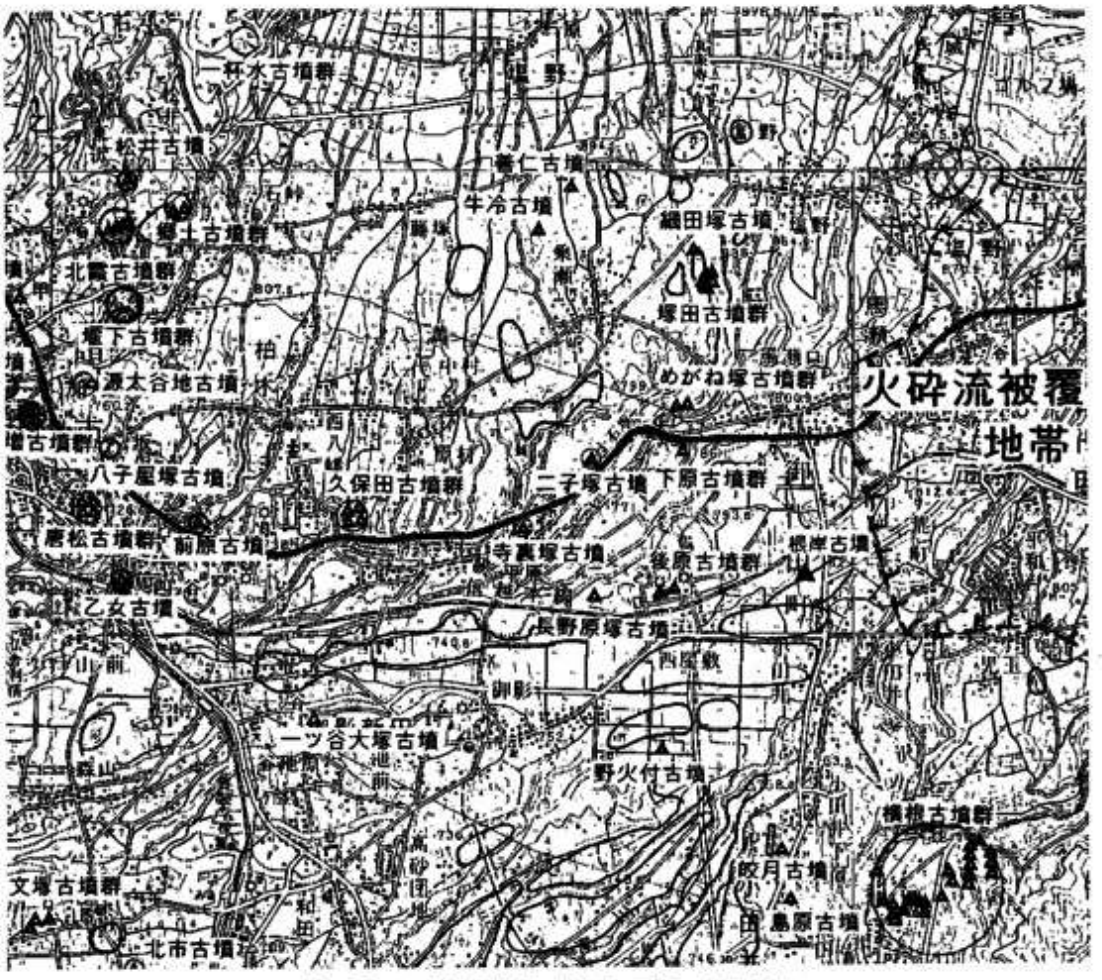
復元工事　天井石取りはずし　平成9年10月13・14日
　　側壁の補強工事　平成9年11月10～13日
　　天井石の架け直し　平成9年11月14日

1　古墳と調査の概要

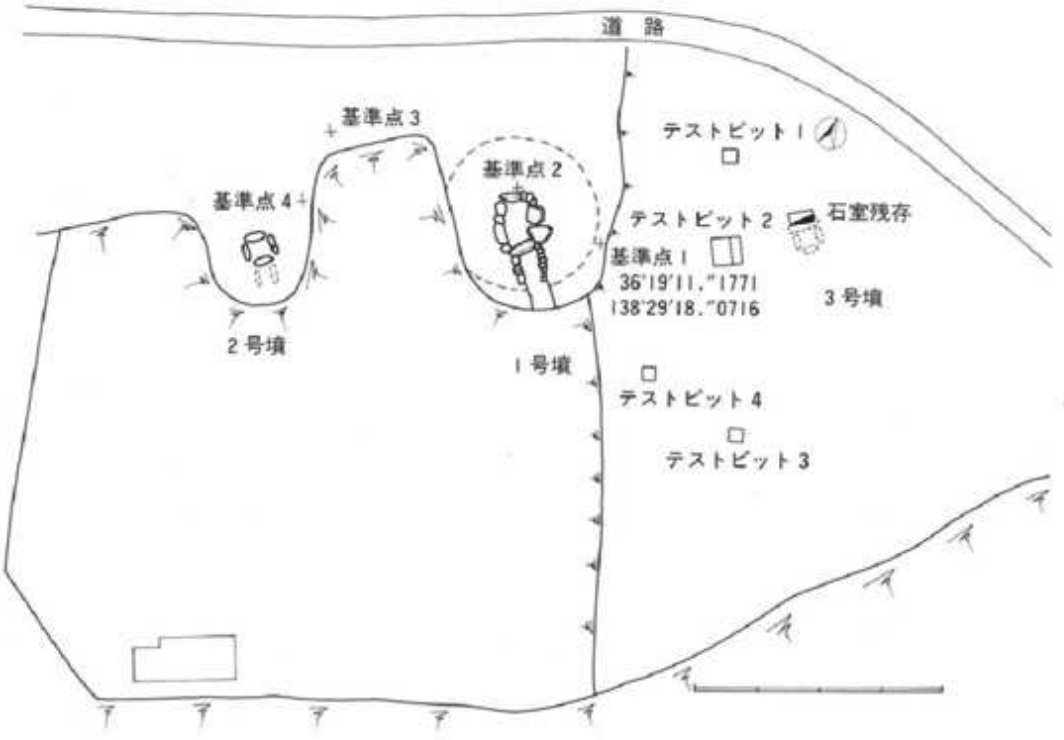
町内には細田塚・塚田・めがね塚・下原・根岸など5か所の古墳・古墳群があり、近接する善仁・牛冷・三子塚・寺裏塚・長野原古墳（以上小諸市）、後原古墳（佐久市）などとともに海抜780m～870mの間に小地域のまとまりを示している。これらは過去の調査例に乏しいため、築造の変遷過程が解明されていないが、およそ、7世紀を中心とした時期に築造されたものらしい。

町では過去に下原古墳（7世紀後半築造）、細田塚古墳（7世紀末）、塚田古墳群（7世紀前半）の発掘調査を行った。このうち、塚田古墳からは轡を携えた埋葬馬が出土し、官牧「塩野牧」開設以前、すでに当地に私牧があったことが示唆されるなど多大な成果を上げてきた。

平成8年、御代田町誌歴史編上の刊行が準備されるにいたり、町内の古墳資料を更に深く掘り下げる必要性が生じた。そこで未発掘であった馬瀬口のめがね塚1号古墳に注目し、土地所有者



第1図　めがね塚古墳の位置と周辺の古墳分布



第2図　めがね塚古墳配置図（1：500）

写1　めがね塚古墳群遠景

のご厚意を受けて学術発掘調査を実施した。その結果、町内最大の巨大な石室、佐久平第３位の長さを誇る鉄製の大刀が発掘され、町の貴重な歴史的文化遺産であることが判明した。また、１号墳の両翼には２・３号古墳があることも判明した。２号墳は現存するが、３号墳は昭和23年に土地改良のため、地主の柳沢吉兼氏により解体・消滅していたことが明らかになった。その際に出土した刀等は、故永原秀山氏が所有していたが、現在は行方知れずとなっている

平成９年、めがね塚古墳の重要性を再認識した町は、石室内の再調査、天井部が陥落するなど危険な状態にあった石室の補強、復元工事を実施し、12月に完成の運びとなった。また、周辺の調査も実施し、縄文早期・晩期の土器のほか、３号墳石室の残痕を発見、その位置が確定されるに至った。

今後は２号墳、縄文土器の継続調査が計画されている。その実績を基礎に古墳とその周辺を徐々に整備し、史跡として有効な活用を図る必要がある。

２　調査の成果

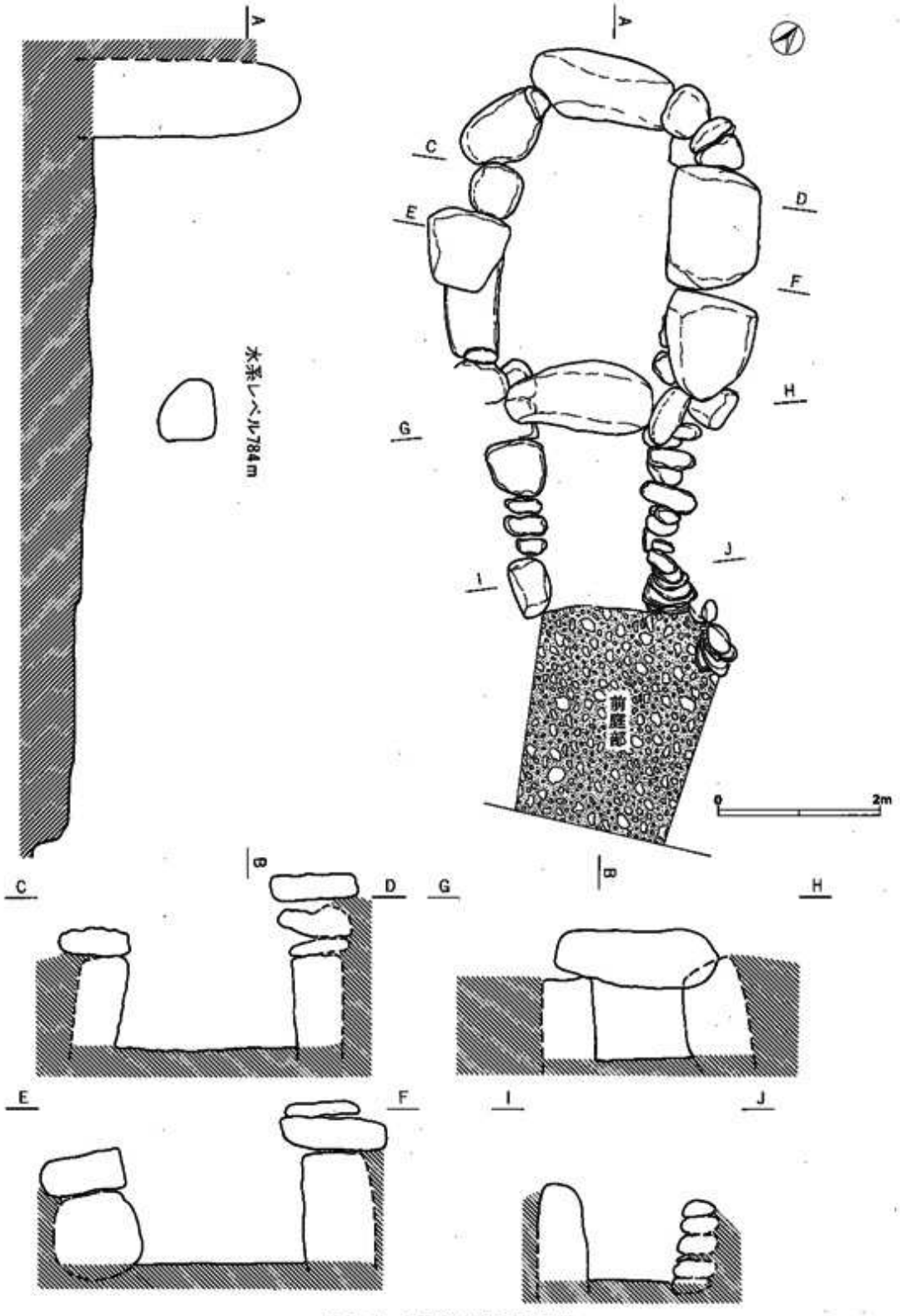
(1)墳　丘

古墳は、浅間山剣ケ峰の中腹に水源をもつ、繰矢川の侵食によって形成された台地の南向きの斜面（海抜785m前後）に立地する。この斜面は、背後の台地からの砂の流出･堆積が著しく、石室は側壁上部まで流出砂で覆い尽くされていたため、現状では墳形・墳丘規模ともに不明であった。そこで平成８年には墳丘部に試掘坑を掘削し、盛り土・外護列石等の確認を行った結果、盛り土はすでにほとんど残っていないことが判明した。また、外護列石についてははっきりと把握できなかった。平成９年には羨道部から前庭部の調査を行ったところ、羨道部東側で先端の検出がなされ、そこから外護列石が円形に取り巻いていく状況が観察された。この状態から察せられる墳形と規模は、直径10m程度の円墳である。今後の調査では、外護列石の追求を更に行い、墳形・規模を明らかにする予定である。また、周溝についても現状では未確認である

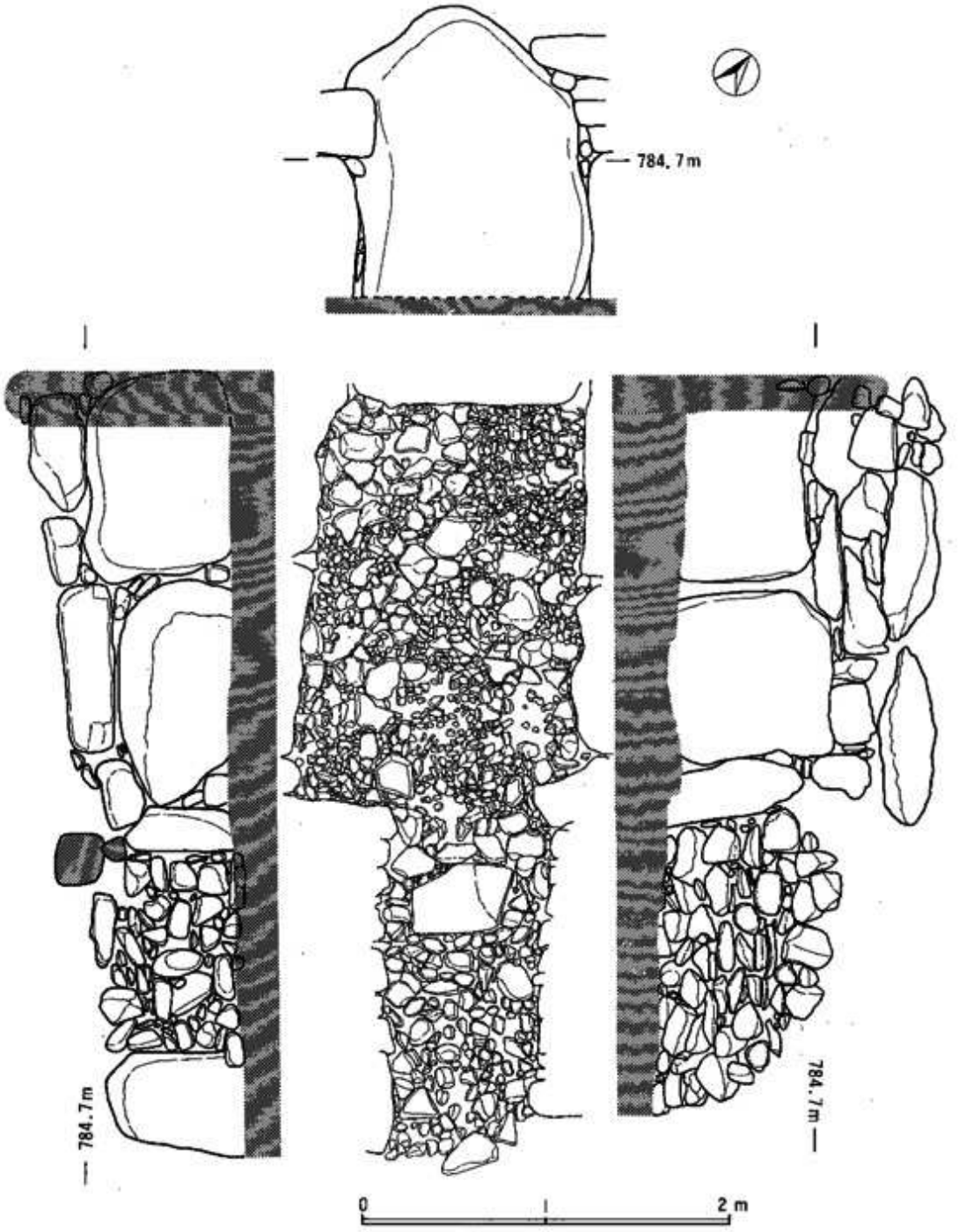
(2)石　室

石室は南東に開口し、型式は西に比して東の開きが小さいものの、基本的には「玄門付両袖式横穴式石室」と呼ばれるものであった。玄室の入口の両側には立派な柱状石が立てられ、そこに円柱状の鴨居石が架けられていた。鴨居から床面までは、しゃがんで通過できる0.92mの高さ、玄室内は床面から天井まで大人が悠々と歩ける2.2mの高さが確保されていた。

石室の組み方は、奥壁が高さ2.6m以上の巨大な一枚岩、側壁は東西共に高さ１m程度の矩形の巨石（切り出したものか自然切離したものかは不明）を２個並べ、東壁では更にその上に高さ50cm前後のへん平な石が２～３段積み上げられていた。これが、側壁の旧状に近い状態と考えられる。しかし、西側壁の最上段の積み石はいつの間にか失われ、この際に側壁上に被せられていた



第3図　1号墳石室平断面図

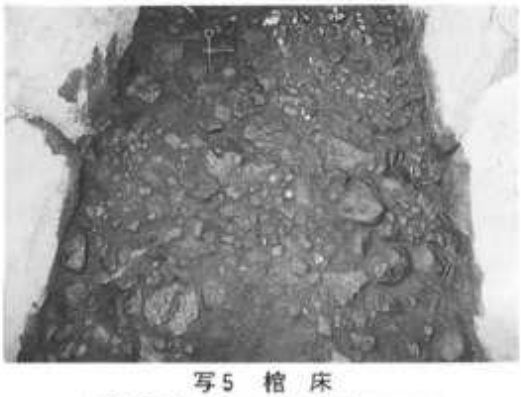


第4図　1号墳石室展開図（1：60）

写2　石室から見た玄門

写3　玄門から見た奥壁

写4　棺　床



写5　棺　床

写6　羨道から見た鴨居石

写7　奥壁と棺床

写7　羨道の西側壁

写8　棺床の実測

写10　玄室東側壁

写11　玄室西側壁

2枚の天井石はバランスを失い、陥落したものと考えられる。

羨道部になると石材の大きさは一変する。側壁には大きくても径40cm小型の石を乱雑に積み上げ、西側の先端部には、1.22m以上の柱状石が立てられていた。東側にも同様な石があったと考えられるが、すでに失われていた。また、玄室と同様に側壁上に1t未満の2枚の天井石を、被せていたが、前方の天井石はすでに失われ、後方の石は床面に落下していた。

石材はもっぱら安山岩が使用されていた。原産地は明確でないが、周辺で産出できる石材でなく、森泉山周辺から運んできたものらしい。石室を解体したわけではないので、部材の重量すべてはわからないが、玄室前方の天井石が3t、後方が8.7tであった。

計測値は、奥壁～羨道部までの長さは6.6m、玄室は長さ3.43m、幅2.32m前後、羨道部の長さ3.16m、幅1.38mを測り、佐久地方の同型式の石室では大型の部類に属する。両翼に位置する2・3号墳よりはかなり大きく、1号墳が主墳であることがわかる。

羨道から玄室までの床面には、径30cm前後の表面がへん平な石が選択され、敷きつめられた。玄室にはその上に更に玉砂利を敷いていたが、第4図のように後世に荒らされた痕跡も部分的に認められた。羨道部には玉砂利を敷かなかったようだ。羨道部の奥では、一列に並べられた径40cmの石と80×60cmの板状石が検出された。本古墳には框石が認められないので、あるいはこれが代用になっていたのであろうか。

前庭部については羨道部床面と同レベルまで掘り下げを行い、確認を図ったが覆土と床面を明確に区別できる状態に至らないままに、調査を中断した。この確認は再度行う。

⑶副葬品の出土状況

前述のように床面の状態からみて、部分的に荒らされてたことが確実なため、出土位置が旧状を保っているとは思えない。大刀1・小刀1と平瓶1は北西隅、小刀2・3と耳環は南西隅、丸玉1～4は南東隅とまとまりをみせる。それぞれ別々の遺体の副葬品であったと考えられる。人骨は玄室内北西隅に数体分集積していたほかは、玄室内と羨道部に散在するに過ぎない。一体分まとまって検出された人骨はなく、あいつぐ追葬で掻き寄せられてしまったり、後世に荒らされた結果、このような状態になったと考えられる。したがって、羨道部から検出された馬具の鉸具

写12　玄室北東隅に集積する人骨

写13　鉸具２出土状況

写14　発掘スナップ

写15　発掘スナップ

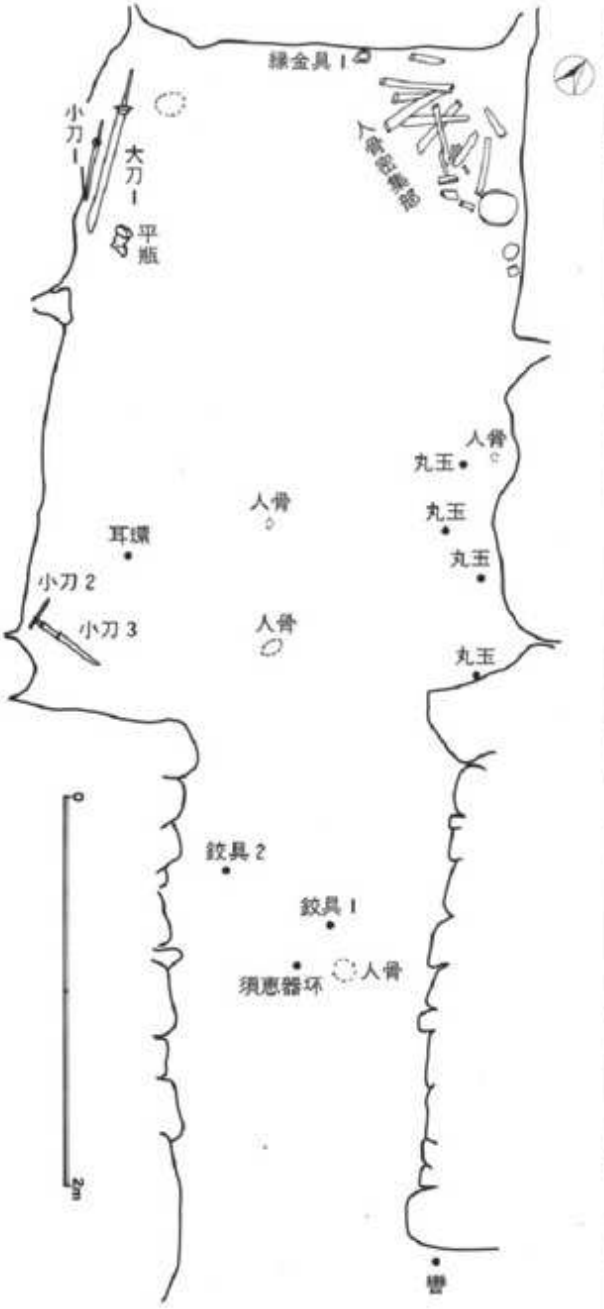
写16　人骨の慰霊式

や須恵器坏、前庭部の轡などは人骨と共に掻き出された可能性もある。

(4)出土人骨と副葬品

人骨は相当数の個体があると考えられるが、鑑定が間に合わなかったため、後日に正式報告を行うことにする。副葬品は盗掘に遭ったと考えられる割りには豊富な内容であった。

刀は４振りあり、すべて鉄製で鎬のない平造りの直刀である。大刀１は六窓倒卵形の鐔と鎺を装着したままの状態で刃関・背関の有無はわからない。茎には２か所に釘が貫通したままの状態である。全長92cm、刃部は長さ72cm、最大幅４cm、茎は長さ20cm、幅2.1cm、峰の厚さ0.8cmを測る。小刀１は刃関・背関を有し、無窓の小型の鐔と鎺を装着する。茎の先端に折れ曲がった釘が貫通する。全長48.5cm、刃部は長さ37cm、最大幅2.8cm、茎幅1.6cm、峰の厚さ0.6cmを測る。小刀２は刃関・背関をもつ。六窓倒卵形の鐔に銅製の責金具をあてがい、茎先端に釘が貫通する。茎が折れているが、全長34cmと考えられ、刃部は長さ30cm、幅2.4cm、茎幅1.3cm、峰厚0.6cmを測る。小刀３は刃部に銅製の足金物が２か所に装着されている。足金物から発生し



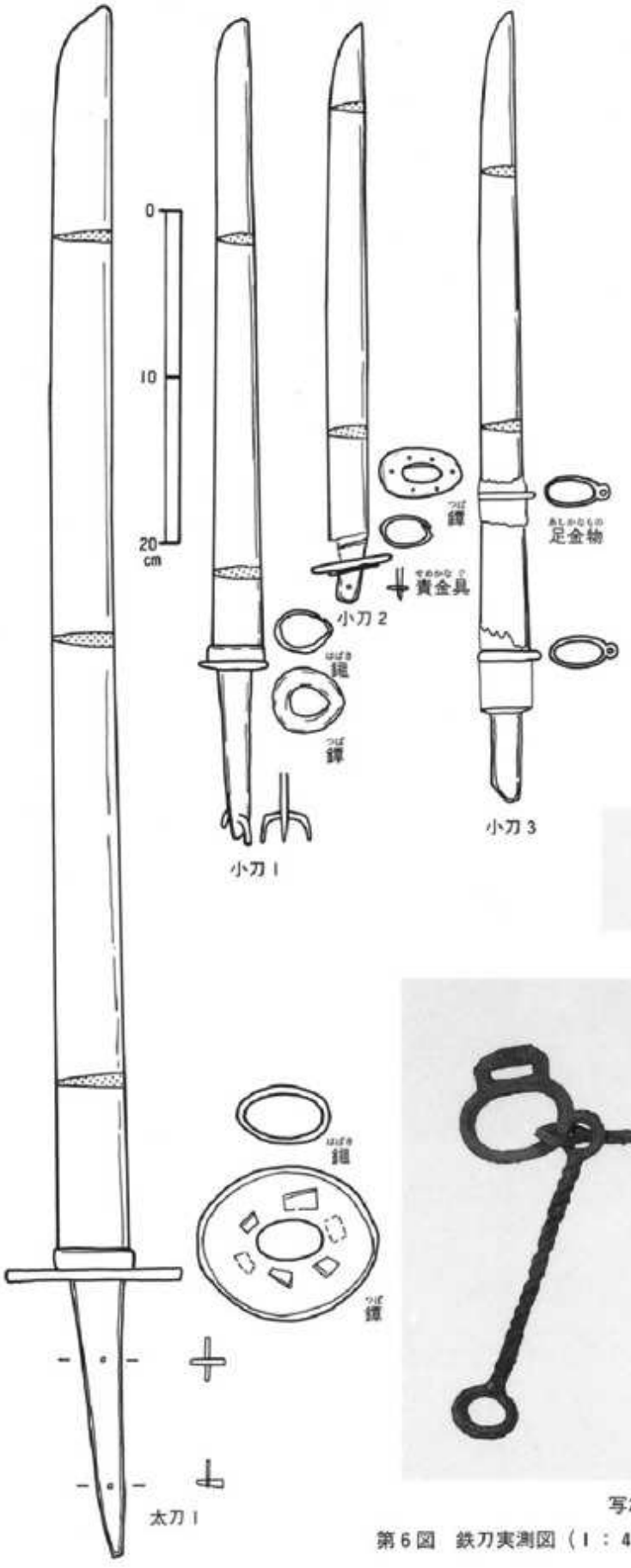
第5図　石室内遺物分布図

写17　太刀1、小刀1出土状況

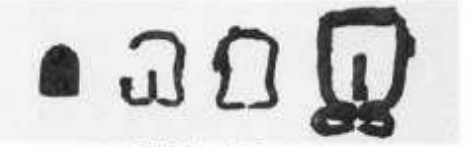
写18　小刀2・3出土状況

写19　鉸具1出土状況

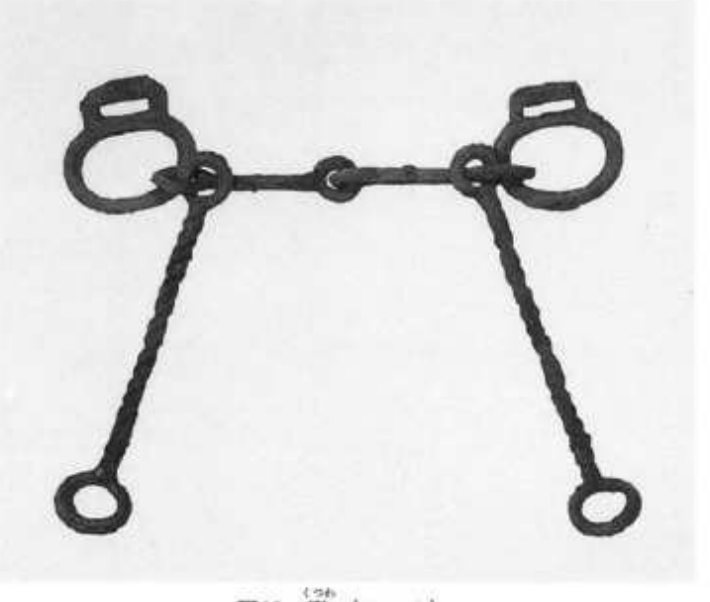
写20　轡出土状況



写21　縁金具？（1：4）

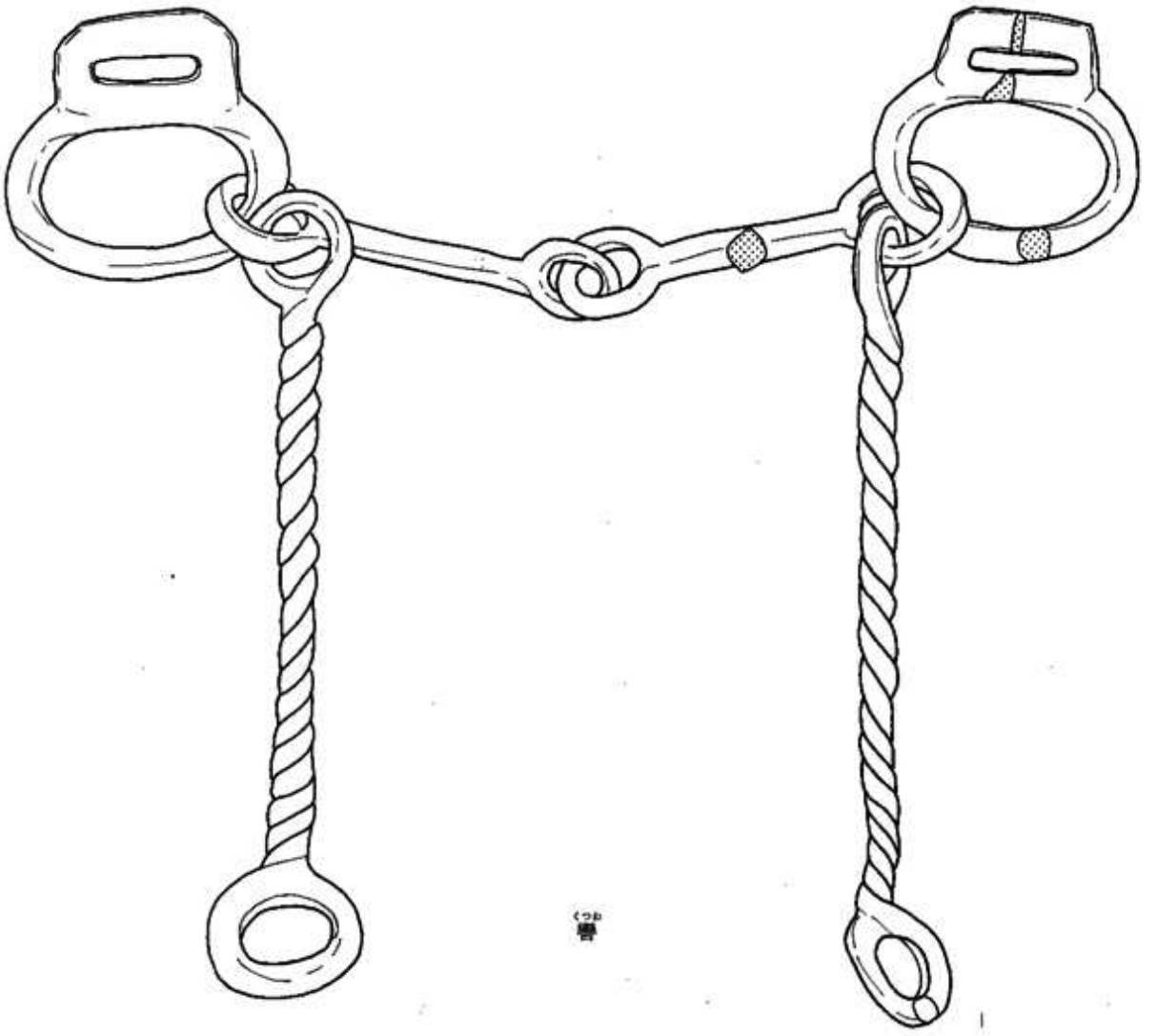


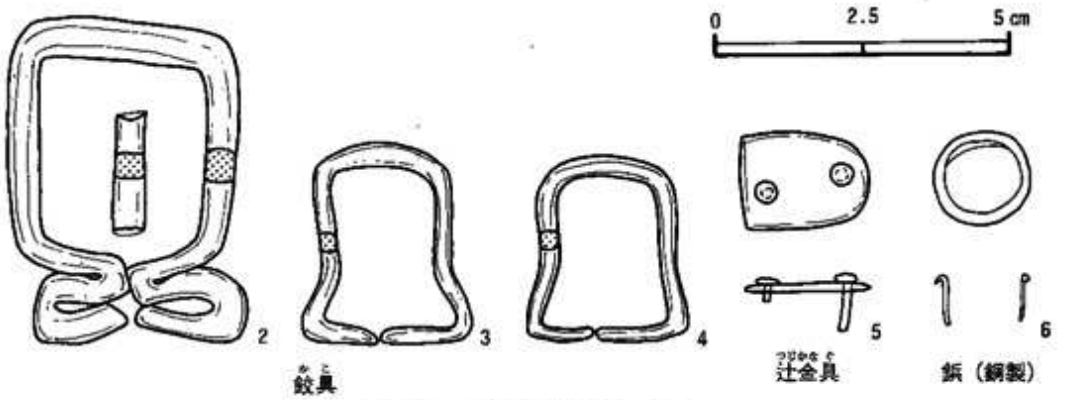
写22　辻金具　鈕具（1：4）



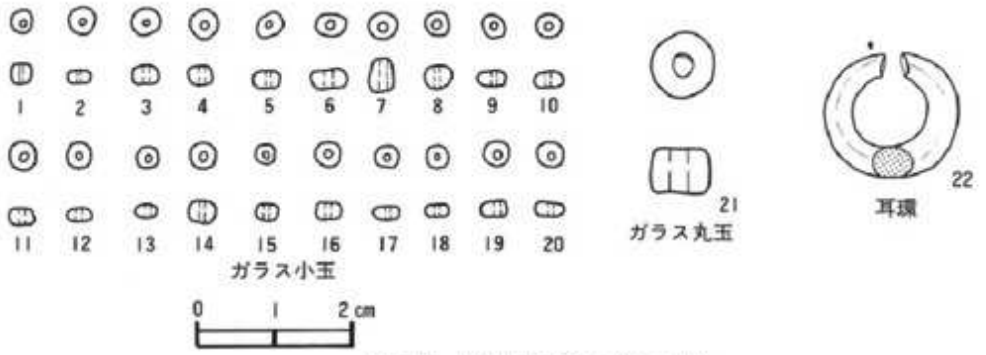
写23　轡（1：4）

第6図　鉄刀実測図（1：4）





第7図　馬具実測図（2：3）



第8図　装身具実測図（1：1）

第9図　土器実測図（1：4）

写24　平　瓶

写25　玉類の選別

た緑青に守られて、木製の鞘が腐らず残っており、これに覆われているために関の有無はわからない。茎に目釘穴は穿たれていない。全長46.8cm、刃部は長さ41.2cm、幅2.4cm、茎幅1.6cm、峰厚0.6cmを測る。縁金具1は出土位置からみて大刀1に付属するものであろうか。

馬具は轡・鉸具・辻金具がある。轡は実用的な素環轡で、欠損箇所はない。銜端の環に引手と鏡板を連結するシンプルな構造で、引手には捻りが加えられている。銜の長さ19.8cm、引手の長さ20.5cmを測る。鉸具は3点ある。大型の鉸具2は6.1×4.4cm、3は3.9×2.5cm、4は3.6×2.5cmを測る。玉類はガラス丸玉4個と、ガラス小玉20個が出土した。丸玉はガラスの劣化が進み、旧状を留めていないため、参考に1点だけ図示した。ガラス小玉は破損したものや発掘の際、エラーしたものもあり、かなり多数あったものと考えられる。大きさは直径3mm前後である。

耳環21は、直径1.7cmの銅地金張りの製品と考えられる。

土器は須恵器が主体である。器種には平瓶・蓋・坏・甕などがある。平瓶1は把手がつかず、器高は13cm程度である。表面には自然釉が付着し、胎土は黄灰（標準土色帖2.5Y6/1)色を呈する。2は羨道部の出土。返しの着く蓋で、口径17.6cmを測り、胎土中に黒斑が認められるので佐久地方の窯で焼かれた製品かもしれない。色調は灰黄褐(10YR6/2)。3は玄室内の出土。受けをもつ坏と考えられるが、内底面の調整は雑で、摘みのない蓋の可能性も残される。底面は回転ヘラケズリが施されている。口径9.5cm、器高2.5cm、底径4.3cmの小型品で、胎土の色調は灰(N6/1)色を呈する。

⑤築造年代

編年が進んでいる須恵器を基準にみると、平瓶1・蓋2・坏3は7世紀中葉の所産で西暦650年を前後する時期を大きくさかのぼらず、8世紀に近い時期までは下だらない。また、石室の特徴は最近の型式学的研究を援用するとほぼ7世紀中葉に位置付けられる。676年から平城京遷都の710年までに佐久地方で築造された古墳は著しい狭小化が指摘されているので、めがね塚1号墳はこの時期には当たらない。以上の考えから、めがね塚1号墳は大化の改新645年から壬伸の乱672年頃に築造されたものとみられる。

3 まとめ

めがね塚1号古墳は、平成8年度は石室内の清掃、9年度は復元を主眼として調査が実施されたため、その構造を明らかにするに足る調査が網羅的に行われた訳ではない。今後の課題としては、墳丘、墳形や前庭部の更なる確認、刀・馬具などの鉄製品の保存処理、人骨の鑑定などが挙げられる。特に人骨鑑定は当時の家族構成を知る上でも重要である。ここでは現状で得られた調査成果を箇条書きで列挙する。

1　主墳は１号墳であることが判明。１号墳は「玄門付両袖式横穴式石室」と呼ばれ、佐久地方では一般的な型式の石室で、大化の改新から壬申の乱が起こった時代に築造された。奥壁～羨道部までの長さは6.6m、玄室長3.43m、幅2.32m前後で町内では最大規模を誇る。過去に調査された単独墳の佐久市寄山古墳や臼田町幸神１号古墳と同程度の玄室規模で、幸神古墳は６基群集している中で１号墳が最大で主墳である。したがって、めがね塚１号墳は佐久地方の同型式の古墳のなかでも大きい部類に属することがわかる。

2　大刀の出土。今回の調査で圧巻だったのは全長92cmに及ぶ大刀である。この刀の鐔は六窓であり、最も活発に製作されたのは６世紀の後葉であったらしい。６世紀後葉築造の望月町山ノ神３号墳では同様の鐔で全長91cmの刀の他豊富な副葬品が出土し、１号墳でもこれと同等の刀を含め、多量の刀と副葬品が出土した。未発掘の２号古墳はこれら１・３号墳よりも大きく、更に多量の副葬品が眠っているらしい。こういった、当時特別な位置にあったと考えられる古墳群は別として、臼田町幸神古墳群では取り分け大きな１号墳にだけ、全長84cmの六窓鐔が着く大刀が副葬されていた。これはめがね塚古墳群と良く似た状態と考えられる。調査例の少ない段階であるが、７世紀中頃の古墳群の主墳には、当時ひときわ大きな六窓鐔付きの大刀が副葬される習慣があったことを推測する。これが正しければ、この大刀は古墳群を形成する首長グループの中でも首位に立つ人物でなければ、所有が許されないものであったことになる。尚、大刀についてはＸ線透視の上、再考する。

3　３号墳の位置が判明した。昭和23年の解体後、今日に至る間に正確な所在がわからなくなっていた３号墳の位置が、確認調査により判明した。これによると１・２・３号墳はほぼ一直線に並ぶ。

4　轡・鈹具などの馬具が出土した。御代田町は、律令時代に『塩野牧』が経営されていたことが文献により伝えられている。塩野の塚田古墳の調査では７世紀前半の古墳から埋葬馬と轡が出土し、当地が官牧開設以前から馬と深く関わっていた地域であったことが推定された。今回の発見は、７世紀後半段階でも馬との関わりが深っかたことを示す。

5　崩れかかっていた古墳が復元された。１号墳はいつ崩壊したのかわからないが、平成８年に調査に入る以前は、単なる石ころの山と化していた。調査に入り礫や土を取り除き、わずかな透き間に体を滑り込ませ、石室内を測量した。その結果、意外にも大きな石室であることが判明し、多くの人に町の貴重な歴史遺産だと認識された。平成９年復元工事が実施され、堂々とした石室が復元された。現在ひと冬が経過しようとしているが、大雪があったにも関わらず、石室はがっちりと組合わさっている。これからは古墳周辺を整備し、多くの人に活用してもらえるように創意工夫していかなければならない。

4　復元工事の記録

写26　石ころに埋もれた古墳

写27　崩壊寸前の１号墳（平成８年）

写28　天上石の除去（平成９年）

写29　石室内調査（平成９年）

写30　側壁の補強工事（平成９年）

写31　天井石8.2ｔの架け直し（平成９年）

写32　天井石３ｔの架け直し

写33　微調整

写34　復元前の１号墳

写35　復元後の１号墳

報告書抄録

ふ り が な	めがねづかいちごうこふん
書　　名	めがね塚1号古墳
シ リ ー ズ 名	御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第24集
編 著 者 名	小山岳夫
編 集 機 関	御代田町教育委員会
所　在　地	〒389-02　長野県北佐久郡御代田町大字御代田2464-2　TEL0267(32)3111
発 行 年 月 日	1998年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
めがね塚 1号古墳	御代田町 大字馬瀬口895-1			36° 19′ 11.″ 1771	138° 29′ 18.″ 0716	平成8年 8月20日 ～ 9月4日 平成9年 10月15日 ～ 10月31日	—	町誌編纂および復元整備のための学術調査

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
めがね塚1号古墳	古 墳	古墳時代後期	横穴式石室古墳	大刀・小刀・馬具・耳環・須恵器・ガラス玉・土製丸玉・人骨	町内最大の横穴式石室古墳。佐久地方でも同型式の石室としては大きい。7世紀中～後葉の築造。馬具が出土し、牧との関連示唆。石室の復元整備が行なわれ、今後の活用が検討されている。

めがね塚1号古墳

長野県北佐久郡御代田町めがね塚1号古墳発掘調査報告書
1998年3月31日　発行

編　集　御代田町教育委員会
発　行　御代田町教育委員会
印　刷　鬼灯書籍株式会社

編集・発行　御代田町教育委員会

ガラス小玉

○１号墳出土の直刀
左から92cm、49cm
34cm、47cm

○クレーン２台でやっと持ち上がった天井石、その重さ8.2トン

○巨大な奥壁と細かな石を敷いた棺床